魔眼転生記―NINJA―伝

紫苑試験式

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〝忍〟という言葉の定義の限界を片足ぶっ飛びに踏み越え潰していく、自己主張の激しい〝自称忍〟達が蔓延る世界。

俗に言うＮＡＲＵＴＯ二次創作。

そんな全く忍ぶ気配のないＮＩＮＪＡ達の台頭する世の中に転生してしまった主人公が、それなりに好き放題するかもしれないお話。

ぶくぶくと湧いてくる難事、増えていく一方の疑問。

いつか回収したいと願いたい、伏線を張りっ放す大喝劇（？）を見たい方はどうぞ。

※以前ににじふぁん等で頓挫し、ａｒｃａｄｉａでｐａｓｓを紛失してエタってたものです。少し改稿して挑戦します。三度目の正直になればいいな、と思います。

目　次

1．転生サラブレット ―― 1
2．とある忍の追憶と展望 ―― 11
3．覚醒する自覚 ―― 17

1・転生サラブレット

物語などでよく使われる〝異世界〟〝パラレルワールド〟〝平行世界〟。
呼び方は様々在りそれが定義するものも幅広く、類するものは無限に存在する。
そして、それらの全てに共通することは『もし～なら？』と人が想像した物、ということだ。

あぁ、それっぽいことを言ってるが所詮は創作の話だ。
もしかすれば実体験を基にしたものもあるのかもしれないが、少なくとも俺自身は存在しないものだと思うし、有無の証明云々はその道の人に任せておけばいい。
特に興味無いし。

――ここで問題なのは、有り得ないはずの〝それ〟があってしまった場合のこと……回りくどい言い方を止めれば、俺は〝その〟異世界にいる。
それが問題なわけだ。

前提ぶち壊し。
はい、こんにちは皆さん。
俺の名前は氷河才蔵（ヒョウガ　サイゾウ）。
親は、〝うちは〟と〝日向〟それぞれの宗家から見た内戚と外戚。
即ち一族の〝下っ端〟扱いの大勢の中の一人から見た孫に中るようだ。
血筋は繋がってるみたいなので一応ギリギリ一族として間違いはない。恐らく。

……はい、ＮＡＲＵＴＯの世界に転生です。本当に、有り難うございました。

とまぁ、よくありがちな紹介をついカッとなってやってしまったわけだが、そう、転生してしまったのだ。

と言っても特に前世に思うことも無い――わけは無いわけなんだが、この世界ではそんな感慨に耽る暇はない。

ので、状況の確認に移ろうと思う。

まず、自分の身体。

連呼してるように、転生なのだから当然赤ん坊だ。

一口に転生とか言ったが、この不可思議で理不尽な現象は、そんな簡単に済ませられては堪らない。

動かせない身体。

目は開かず耳も聞こえない。

身を守るはずの皮膚が薄く些細な刺激が痛みを伴う恐怖。

そこかしこで触れる生暖かい感触からとよく分からない液体の中、という状況である。

悲劇は母の体内にいた時から自我はあったことで、転生にあってそれが普通でないのかどうなのかどうなのかは当然判断に困るが、始めは幽閉されて拷問でもされてるのかと思ったものである。

胎内にいる時の記憶があるとか言ってた人の何となくいい話的なことをを聞いたことがあるが、実体験では冗談じゃないし、二度と御免である

もしかしたら赤子に魂だか記憶だけだかが憑依しただとか考えてもきりはないんだろうが、何であれ関係ないしどうでもいい。

やっと身体が動かせるようになってきた程度の現在含め、人としての尊厳が揺らぐことになったが、やっと生まれる事が出来るといういらん試練を乗り越えた身からしたら、この際どこまでも耐えてやろうというものだ。

次、前述した親。

父は、うちは一族の端に名前を連ねていた忍。

とは言え一族の本当に下っ端であり、一応上忍らしいが写輪眼も開眼していない模様。

九尾来襲のときに怪我を負ったため、今は後衛に回っているようだ。

母は、日向一族の分家の分家にあたり、元医療忍者。

この人もまた、形だけ白眼を開眼こそしていれど殆んど適正がなく、それどころか負荷が掛かったのか段々視力が落ちてきていて、活用するまでの事はほぼ出来ないらしい。

二人とも、血は流れているが親兄弟で適正のあった者はなく、限りなく薄くなっているとされた為、結婚同時に改姓して氷河と名乗っている、らしい。

実質的に一族から不要との烙印を押されたのに等しいのではないかとも取れるが、忍びの家の教育としては常なのか子守唄代わりに幼子に対して語って聞かせるくらいなのだから、悲嘆の色は見えず実家には誇りを持っていると思われる。

両親の良好な仲を見るに別に政略結婚だとかそういう類のものではなく、むしろ恋愛結婚を押し通したような雰囲気が見られる。

因みに余談だが、父と母の年齢差は3つ程。更に、母はかなりというかもろに童顔で小柄な体型だ。

……別に他意はない。

「サイゾウ、ご飯の時間ですよ。……全く、あなたは大人しいから放って置いたらひっそりと餓死してしまいそうねぇ。誰に似たやら妙な所で意地っ張りになりそうだけど、身体はしっかりしているし元気一

杯だからそこは心配は無さそうね。
さぁ、こっちにいらっしゃい」

暫く、もう暫くの我慢。
そう言って胸元に抱き寄せているこのロリ母と、××した父は生暖かい目で見ることを決めた。

まぁそんな不自由な生活に耐えしのぐことここ三年。
成果としてはようやく不自然にならない程度に読み書きを出来るようになったことだろうか。
どうやってかと言えば、父親が読み終わった新聞（報誌というらしい）を落書きするフリをしてねだることに成功したことが切っ掛けだ。
本の読み聞かせなどもしてもらっていたので、興味の対象となるだろう基盤が出来ていたのも功を奏したのだろう。
ともあれ、驚きはすれどそこまでとんちんかんな事態でも無かったようだ。
一歳半ばくらいの時から始めたのだが、母のご近所付き合いでの話でも当たり前だがやはりこの年ではかなり早いとの評判だ。
まぁ前述の両親の情報のような自分のお家の事を子守唄代わりに繰り返し語って聞かせられてはいるわけで、小さい頃から自覚を促せていく方針は忍の家では当たり前のことなのだろう。
この環境なら、早熟なのも不思議ではないのだろう。

とは言えまだまだ文字を書いたりするのはまだまだ拙いもので、微笑ましいくらいに留まっているくらいだと思うが。
同年代に比べ圧倒的鮮明なインプットに対して、アウトプットする過程で思う様に体が動かないのだ。
事実、読みはともかくとして書きの方は、中途半端な漢語混じりの行書体が現代日本人の俺（中の人）には慣れず、結果ミミズののたくったような字になってしまうのだ。

まぁいきなりすらすらと文字を書き出す赤子など、かなり不気味だろう。
その点は下手に勘ぐられずに済んで帳尻が合ったとみていい。
それはともかく、情報の取得手段を得たのはかなり大きい。
赤子と言う身分の間合いが探り探りな現状、正確に内容を把握できているとは思われずに渡されているものから堂々と知識を得ることが出来るのだから。
これによって、取り敢えず大体の世間の常識を得ることができたのだが、どうも自分のいるここは一概にＮＡＲＵＴＯの世界と同一とは言えないのではと今は考え始めている。
原作では間に合わせの設定が目立った様に思えるが、それとも違うどうもよく分からない事象が多いのだ。
まず文化水準からしてちぐはぐで、かなりしっかりとした家具を初めとする生活用品の製造、ラーメン等の一部食文化の発達、高度な建築様式や上下水の設備、そして電力なのか何なのか謎の動力源で供給される光源、などなどの、なかなかなインフラぶり。
少なくとも町並みを伺うに、電線の類は見当たらない。
そのクセ本来なら明らかにクナイを投げるよりも速いだろう画一的で訓練も比較的容易な筈の銃火器の類は汎用化を見せないまま未発達（全く無くはない）であるらしく、道は誰が整備するのか結構整っているにも関わらず交通手段は殆ど徒歩（歩いた方が早いという戦慄の説が濃厚である）。
こんな話も矛盾のある原作やアニメということでスルーするべきところなのかしれないが……出て来ていた筈のものが影も形もみあたらない、というのが少し気になった。
原作を特に事細かく究明していた訳ではないが、少なくとも無線の類は存在していた筈だし、綱手が通っていたパチンコ屋等の近代設備がある現代に近いものが舞台になっていたと思う。
後者に関してはこの里には無いというだけかもしれないが、テレビだとかのある種娯楽のものは身近に存在せず、新聞を伺うに情報伝達に然程遠隔のやり取りが成されていない様に思うのだ。

これは割と重要な見落としや何か途方もない絡繰りがあるのかもしれない……なんてことも考えたりしたが、勿論忍が世を動かしているらしいことは変わらないし、何か不味いことでもあるかと聞かれれば特に思い浮かばないのであった（爆発）

強いて言えばオーバーテクノロジー満載の映画の舞台は前提が崩壊しているような気もするが、その辺は知ったことではない。

始めのほうの映画には女優がキーマンだったものもあった気がするが、彼女は失職か。まあ元々存在しないなら失職も糞も無いわけだが。

逆に、そのうち火薬や何かを使って現代技術チート！みたいなことを試してみるのも一つの道か。

まあ上手くいかないと思うが。

新聞には五大国の情勢や火の国の政情などが当たり障り無く書かれ、残りは一風変わった広告等が載っている。

当然と言えば当然だが、俺の当たり前であろう根本的疑問が殊更に紙面に載ることはなく、しばらく謎は謎のまま解消されることは無さそうだが。

推測では忍の無茶苦茶過ぎる存在が文化の発展を置いてけぼりにしているのだと思われる。

それか、原作との相違点は忍の活躍を邪魔されないようにするためのご都合主義だと考えると全て丸く収まってしまい、ちょっと笑えるものがある。

閑話休題。

転生といえば定番の、自分が保有する原作知識の価値だが、一応今のところ原作沿いに進んでいるように思える。

まず九尾の来襲は俺が生まれた年らしく、木の葉隠れに大きな打撃を与えたものの、最近やっと復興の目処が立ってきた状態のようだ。

生前――という言うべきか判断に困るが、ジャンプを立ち読みしていた最新のものは鬼鮫が八尾とナルトの所に襲ってきた辺りで、単行

本では読んでないが五十何巻かだ。
これから終結にむかってまとめに入るだろうという雰囲気だったが、やはり最後はマダラに勝って終わりか。
これは上手くやっていけば結構、いや、かなり優位に進めていける程の情報量だろう。
とにかく目先の問題としては、取り敢えずヤバいのはうちはの一族のクーデター未遂辺りか。
……後は日向一族の影武者事件なんかも、日向ネジの話からしてそのくらいだった気がする。
後者は明確にいつだったのか覚えていないが、原作キャラ達に確執を生むもの。
これは、当事者達には悪いが自分のことで精一杯なので、放置せざるを得ないだろう。
別に善人を気取るつもりも無し、ここで介入して未来が変わってしまっては困るのだから。
それはさて置き、やはり問題はうちはの一件。
父は2世代前から写輪眼を開眼していない分家の者同士で成された家系の三男で、一応血はうちはの物だが、もう開眼の見込みが無いとされているらしい。
こういった家はいくつかあるが、それらは一族内では専ら下っ端としてバックアップをしているようだ。
純粋に一族として見做される者とは開眼する可能性のある者であり、実際開眼している者は当然更に少ない。
エリート中のエリートといったところだろう。
そうして考えると、我が家はその一族を更にサポートする駒の一つ程度の下っ端であろう。
うちは一族も全体としては九尾事件の際に結構な数が減っているのだが、本家を中心とした上流の家々は被害が余り出ていない。
これは分家の宿命で、本家を護るために父の近しい親族の家々はこの時かなり亡くなったそうだ。
この尻尾切りのような手際の良さが仇となって、九尾襲撃の犯人だ

と疑われるのではないかと思うが。
それ程、木の葉の里内の他の名家には被害がでているということだ。
このことで里がうちはを更に疎外し、クーデターという形で暴発してしまうというカラクリのようだが。
肝心なのは、一族のどこまでがこれに参加するのか、ということだ。
現実的な話として、我が家のように〝うちは〟から名前を変えたり、忍ではない一般人であったりする者もいると思うのだが、そういった人達はどうなるのか。
あと6年程の猶予があるが、あくまでもうちはの血を引く者の皆殺しが目的ならば、少なくとも忍をやっている者の子供を逃すことは無いだろう。
今後もどうなるかは注意していく必要があり、そして自分の力を鍛えておくのが懸命だろう。

……
……
…

というわけでは有言実行、流石にまだ身体を極端に鍛えるわけにはいかないのでチャクラの確認をする事に。
……と、色々やってはみたものの、ここで今更な話ながらこの〝チャクラ〟という縛りはよく分からない。
はっきり言ってＮＡＲＵＴＯの世界でいう〝忍〟というものは、元の世界で実在した忍とはかけ離れている。
まず忍んでないし、自己主張の激しい〝ＮＩＮＪＡ〟！という名のナニカであるという話しだ。
なまじに本元の忍の事を多少なりとも知っているため、「考えるのではない。感じるのだ」とかいうスタンスだったらどうしようもな

かったが。
そこは幸いな事に、ちゃんと研究と解明がなされ体系的にまとめられていたため、何とかなりそうであった。
自分なりに解釈するとこんな所だ。
チャクラとは漫画などでよく使われる〝気〟の様なもの。
あまり深く考えない方が良さそうだ。
詳しくは、身体エネルギーなる身体を構成する膨大な数の細胞各々から取り出すエネルギーと精神エネルギーなる修行や経験によって蓄積したエネルギーをを合わせることでチャクラとなるらしい。
要は前者が先天的な素養が左右する能力によるもので、後者は後天的な努力による成果だ。
鍛えればどちらも伸びるのだが、身体エネルギーは才能に有無によってはそもそも扱えない。
これは原作でも解説していた気もするが。いざ身をもって認識してみると、かなりシビアなものだ。
忍術が使えない原作キャラのロック・リーなんかは、身体エネルギーが足りなかったかもしくは用いる才能が無かった、ということだろう。
字面的にはあり溢れてそうなものだが。
そして体内で生成・運用するものに関しては努力次第で誰にでも可能なのだろう。
そのため、最終的に行き着くのは上位になればなるほど誰もが皆びっくり人間になっていく、と言うわけだ。
インフレぶりもお察し。

まぁ精神エネルギーの方はこれからとして、身体エネルギーの方は俺はどうなのだろうか。
身体のスペックは日頃の体感、はっきり言って元の世界での三歳児とは比べものならないと思うが。

「まーけっきょくさいごはかんがえるより、じっせんするほーがはや

いか。とにかくからだのしんからながれるものをかんじてしゅーちゅーして……」

地の文ばかりで初めてしゃべったように見えるかもしれないがそんなことはない。

何を言ってるか自分でも分からないがそれは置いといて、新聞のコラムに載っている『誰でも解る忍の極意Ｐａｒｔ３』の通りに実践。

……いや、深くは考えるまい。いつか必ず、忍べよ、と言ってやる。

誰にかは知らないが。

反応があるのか無いのか判断出来ず、何度かやっていると徐々に視界が赤くなってくる。

お、成功か？等と思っていると、いきなり地面が挨拶を敢行してくる不思議。

……ベタだな、と思う約３歳の夜。

今日も今日とて今日この頃であった。

2．とある忍の追憶と展望

九尾の来襲は木の葉の里とその人々に大きな爪痕を残した。
共に戦った同僚が何人も先に逝き、生き残った者も何らかの代償を払わされ。
これが原因で一線を退いた者は少なくない。
かく言う私も利き腕と片目を負傷したが、事件後の人手不足はかなり深刻なもので、当時のソレよりも大幅に戦力が落ちたこの身でも、主に後方ではあるがそれなりの任務に駆り出されていた。

この事件の最大の功労者であるあの四代目火影様ですら亡くなってしまわれたため、指導者を失って空中分解の危機に陥った木の葉を纏めるのは並大抵のことでは無く、再び三代目火影ヒルゼン様が就任するという異例の事態となった。
これは、復興に向けて人々の心を繋ぎ止めることが出来たので成功と言えたが、同時に四代目火影様が築いていた新しく自由な気質の体制から、過去のある種保守的なものに戻ってしまった。
三代目様はとてもいい方なのだが如何せん皆に優し過ぎるため、火の国の上層や里の上役らに付け込まれる隙が出来てしまうのかとこぼす者もいるが、それは仕方ない部分もあるのだろう。
かく言う私にもどうする力があるわけでも無い。
四代目様の〝若い力〟に託そうとしていた三代目様のこと、この事を一番実感しておられるであろう本人はさぞ歯痒い思いだろう。
このことが里の未来にとってどの様な結果を生むのかは、これからの若い世代に託すべき我々の世代の働き次第だと言えるだろう。

悪いことばかりが目立つ昨今、対して私事ではあるが喜ばしい事もあった。
事件以前から交際していた女性との間に子が生まれたのだ。

彼女とはアカデミー時代からの付き合いで、名門の一族同士からか、惹かれるものがあった。
とは言え、お互い一族の中では落ちこぼれと言われていたため、初めの頃は傷の舐め合いだとも言われた事もあった。
だがそんな事は関係ないとばかりに彼女はよく笑い、一族のことなどで荒みかけていた私を癒し、力を与えてくれた。
そんな彼女に思いを寄せるのは必然な流れで、彼女から先に思いを告げられた時は何にも勝り喜び、同時に自分から言えなかった事を悔やみもした。
同じ班に所属し共に切磋琢磨して成長してゆき、私は上忍として前線に、彼女は医療忍者の指導員として後方に配属されるまでになった。
配属が変わっても交流は続き、やがては将来を誓い会うまでになったのだ。
だがそこに来て、端者とて名門の肩書きが障害となる。
〝日向〟と〝うちは〟、共に木の葉の誇る血継幻界の保有一族。
一族の外に秘技を持ち出す訳にはいかず、ましてや里内で一，二を競う一族同士などが無闇に共になることなど許されなかったのだ。
お互い一族から反対され引き離されてしまい、さりとて引く気は無かった私たち。
かくなる上は里抜けでもするしかないか等とまで思い詰めていた時、悪夢の災厄……九尾が里を襲った。
第一次忍界大戦などで猛威を振るった、六道仙人が遺したと言われる〝尾獣〟と呼ばれる口寄せの魔物である。
里では居るだけ総員で対処にあたり、当然うちはにも出動命令があった。
それは彼女とのことで謹慎中だった私も例外ではなく、四代目様が戻るまでの時間稼ぎにあたった。
戦線は正に地獄と言える酷い有様で、一戦級の大忍術であっても生温く見えるほどの圧倒的力の差で、一方的に捻じ伏せられるがままという現実。

その場で緊急召集で揃えられるありったけの中忍・上忍混成の大隊規模で各戸遅滞陽動の役割を担う第一種広域防衛戦術が敷かれたものの、そもそも里の内部に進入を許した状態からの戦闘は尋常でない被害を強いられる戦いとなった。

組んでいた４マンセル小隊は簡易結界忍術を敷くための最前線で時間稼ぎの役割をしていたが、不意の予測不可避の広域大火力を向けられて真っ先に隊長格が隊員を庇って堕ち、甲斐なく同僚も犠牲になり次々脱落していく。

九尾の威容は死の嵐を撒き散らし、なんとか敷いた結界忍術も敢え無く無残に引き裂かれる。

大体国の防衛の中枢の戦力なのだから、まるで歯が立たないという訳ではない。

だが、火力は二歩も三歩も及ばず、速度は劣り、対策を採る時間が無く、奴の放つ戦略規模の炎に対して、圧倒的に数が足りなかった。

そこかしこで小隊を維持できなくなりその穴を埋めるため生き残りを併合しての前線維持もその場凌ぎにしかならず、初動が遅れた避難誘導を担っていた下忍や民間人にまで多大な被害が発生した。

背に守るべきものが多すぎ、想定されていない終わらない絶望的な撤退戦に心体共に擦り切れるまで闘い、心が折れてしまう仲間も出る。

それでも可能な限り里の者を守るため、残りの戦力で崩れかけた家屋を盾に使った遊撃戦で人的被害を抑える指揮に移行したところで、何かを求めて暴れまわる九尾が里の縁外部に向かって突き進んでいった。

結局その後任務から４代目を始めとした精鋭戦力が帰還したところで、負傷により気絶してしまい、意識が戻った頃には戦闘は終わっていた。

荒れ果てた里と戦災孤児など、被害の大きさを前に事後処理は皆が途方に暮れるものであった。

４代目は九尾を止めるため戦死なされ、戦闘終了直後は皆誰かしらの近しい者を失った悲しみに俯き、里は暗い雰囲気に包まれていた。

そんな折、誰からかどこからともなくある噂が流れ出した事が、結果的に不謹慎ながらも自分の転機になった。
曰く、うちはの本家からは被害が無さすぎる。
又、日向も都合よく任務で里を離れていた宗家周りの帰還が遅かった。
これ等は表だって話題にあがるものでは当然なかったのだが、共に足止めに参加していた者から聞いた話で、布いては一族・里内の問題にまで発展した。
この為か定かでは無いが、両一族共に何処と無く結束に亀裂が生じていったのだ。
その最中に彼女の妊娠が発覚して、一族は分家の下っ端のことに一々構っている余裕は無くなっていたようで、二人共に一族の名前を捨てて新たな性を名乗ることを条件に、一緒になることを容認されたのだ。
これはタイミングも良かったようで、新たな家を興すのは人手不足の里としても推奨していて、他にも名家の分家から新たに興す者もちらほらいたようだ。
少しでも里を持ち直すための様々な取り組みに三代目様が腐心なされたことによって、噂による不信感は徐々に収まっていったが、やはり一部のものには蟠りを残しているようにも思える。

そういった環境であって間もなく妻となった彼女は無事出産を遂げてくれて、私も徐々にだが任務に復帰するようになった。
生まれた我が子は、私の唯一の資本を引き継いでかとても健康体で、初めて自らの腕で抱いたときは妻に良くやってくれたと何度も感謝した。
サラサラとした黒髪にはっきりとした目立ち。
両目を丸くし、小さな手を掲げて妻と私を交互に見つめる様には、天地が崩れ落ちるほどの衝撃を与えられた。
正直、親馬鹿と言われようと否定できないだろう。
独り者の部下に自慢して一騒動あったりもした。

そうして成長していくに連れてとても悟い一面を見せ始め、贔屓目抜きでも秀才であろうことが窺える。
えらく手の懸からない子で、妻としてはもっと世話を焼きたいそうであったが、何事も無く成長してくれることに越したことは無いだろう。
家では穏やかな時を過ごし、任務でも配属先もあってか大事ない生活が続いた。
息子が3歳になったころからはいよいよ成長ぶりに驚かされる程活発に動き、まだ判りはしないだろうに、書に興味を持ち始めた。
妻もこれには大いにはしゃいで、子供用の文字の本を与えると拙いながらも筆を走らせるようになった。
直ぐに文字は覚えたようで練習し始め、報誌を欲したので与えると記事を見てうなりながら落書きするのは、それはそれは微笑ましいものであった。

そのようにして過ごす内に、早いもので九尾事件から5年の月日が経った。
月日が流れるのは早いもので、木の葉の里も嘗てのものとまではいかないまでも、勢いを取り戻しつつある。
当時下忍や中忍だった若い世代も育って来たようで、疵持ちの私の出る幕も徐々に無くなってくることだろう。
これを機に逸走のことアカデミーの教師にでも転職してみようか。
引退するには早いと後輩に言われ、どうかと誘われたのだが、そう捨てた考えでもないように思える。

今ちょうど来ている九尾を封じられたという少年の監視の任務も少々思うところがあり、その性質上並行して出来るようならいいかもしれない。

九尾事件を転換期としてこの幸福を得たことに思うところはあるが、後悔はない。

だが、だからと言って嘗ての同僚の事を忘れることは決してない。
先に逝った奴らに報えるよう里のために尽くすのが、せめてもの供養となるだろうか。

願わくばこの平和の礎となっている少年にも強く生きてもらいたい。

3．覚醒する自覚

四歳になって暫らくした頃、遂に念願の血継限界を取得した。
永かった。
チャクラの類のことに関しては独学では今一進展が無く、行き詰っていた感があったため、自身にその種の才能が無いという心配が付きまとい、あまり気は進まないがそろそろ両親辺りにそういったことを習えるように頼んでみるか悩んでいた時の不意を突かれたため、予想外ではあったが嬉しい誤算であった。

――違う、そうじゃない。

それは、一人で行動出来る時間が増えてきた事もあり、自分の部屋などで隠れてこっそり修行をしていた時のこと。
この世界の空気か何かがそうさせるのか、やればやるだけ身になる感覚は一種の快感であり、バック中だとか側中だとか壁蹴り宙返りだとか前世では出来なかったことが不可無く実現していく事を、正直言って楽しんでいた。
何せスペックが高いのに対して身体は軽いためポンポン習得していくので少し調子に乗り、くるくる回転する系の曲芸を網羅した勢いで、原作仕込みの壁登りみたいなことを、ものは試しにと物理的に繰り返しやってみた結果。
ある日、部屋の中。
熊のぬいぐるみが、落っこちたのだ。
……スローモーションで。
チャクラを足に込めて、だとか意識しようにも実感が今一湧かないため壁の側面走りをしてみたもののコレジャナイ感があったのだが、それでも数メートル程走れる様になってきたころ、勢い余って棚に激突し頭から落下しそうになった瞬間の、逆さまな視界での出来事であった。

棚から転げ落ちた、前に母が買い与えてくれたやけにリアルなソイツは、つぶらと言えなくもない黒眼で夕陽を反射しながらこちらを視ていた。
その角度での陰影は筆舌し難いほどに雰囲気のある絶妙なもので、怪談にでも出てきそうなソレが一緒になって逆さまに頭から落下していくのを瞬間刻みに視てしまった時は、死なずにして走馬灯という新手の死亡フラグにでも目覚めたのかと思ったが。
その場は何とか受身を取って大事に至ることは無かったが、臨死体験というには少々大袈裟なものの不可思議な体験に首を傾げるだけであった。
が、暫くしてまたその違和感が表れた時に、何気なく窓ガラスに映った自分をると、あの目尻のところに血管（？）のようなものが浮き出ていたのだ。
正直、ぞっとした。

まぁ、他でもない、白眼の開眼だったのである。

リアルで見ると余り見栄えのいいものでは無いというのが、正直な感想だ。

――それだけじゃないだろう。

白眼を開眼（？）したということに両親がどう反応するか判断しかねたので、取り敢えず母の隙を見て家にあった医療忍術の本などを調べたところ、目の横に浮き出るのは三又神経という器官で、本来は奥にあり目からの映像を知覚するのだが、これをを体質で更に表面にも発生させることで通常では有り得ない知覚の支配領域を増設できる……というのが、日向一族の白眼なんだとか。
なので俗に言う魔眼の括りとは違ってこれら作用の鍵が遺伝による眼であり、これを触媒のような感じで基点にして能力を使いこなす為に鍛錬によってこの疑似知覚器官を発達させる必要があるらしい。

この発展具合の差が、才能の有る無しというわけである。
分類としては身体エネルギーというよりかは精神エネルギー寄りの運用のようで、目指していた本来の壁登りとは違う方向の試みが結果的に功を奏したようだ。
結果オーライである。
まあネジとかが使ってた大回転だとか、柔拳だとかが主な日向の体術に根ざすものなので、そうしてみれば確かに物理寄りっぽいな、なんてちょっと納得である。
マイト・ガイ上忍の班にネジが配属されていたのは、主に体術面を伸ばすためだったというのもあるのかもしれない。
ともあれ、文字通りの棚ぼたではあったものの、取り敢えず発動できるだけでも性能的には申し分のないもので、これを有効活用しない手は無い。
母が白眼の負荷によって視力が落ちてきているという話なので、そこは警戒しなければならないが、今のところその兆候はないので、取り敢えず才能が無い云々はないと思いたいが。
頼りきりにするつもりはないが、基本状態で視界が広がるのと反射神経が跳ね上がるという、1人で鍛えていくのにはお誂えの能力なのは間違いないだろう。
まぁ写輪眼だとか写輪眼だとか、成長チートなアレと比べるのはアレだが。
これまでのチャクラ方面での成果を鑑みるに、やっと希望が見えたので、前向きに捕らえていこうと思う。

――そうやって誤魔化すのも限界だ。

ところで、ここで少し悩んだのが、この先大っぴらに使っていくか否か、という点である。
というのも、周囲の雰囲気から察するにやはり余り目立つのは止めておいた方が良さそうな気がするのだ。
これから先ずっと隠し通せるとも思えないが、かといってコレをフ

ル活用出来るか否かは効率面でかなりの差が出てくるだろう。
だが、恐らくだが両一族の出身だというのを殊更に隠している訳でもないが余りそのことを表に出すことはせず、またそのどちらでもない「氷河」の家名を名乗っていることにはやはりそれなりの理由があるように思う。
両親がそれぞれの一族のらしき人物がその辺りのことを話していたのを偶然聞いていた事があるのだが、分家云々の掟や縛りに関しては、思っていた以上にデリケートなところなのだろう。
少々鼻につく態度で話していたそれら人物達は、思えば俺の早熟なことに関して興味を持っていたのではないかと思うのだ。
特に今回、白眼を持って使いこなすことが出来るようになったとすれば、それこそ宗家に逆らえない呪印をとかいう話になりかねない。
白眼や一族のことを母の視力低下のことを絡めてそれとなく尋ねてみたが、困ったように母が聞かせてくれたものの家柄のこととは違ってそこまで詳しいことが聞けなかった。
俺はまだ別にこの世界基準では大したことができる訳でもないが、4歳でこれなら、みたいに変に悪目立ちをすることもないな、ともう少し様子を見ることにした。

――それも違うだろう。誤魔化しだ。

まぁそれは今後の状況次第として、上記を踏まえたとしても両親からでさえ隠れてなのは、母の過保護ぶりからというのもあった。
曲芸もどきの体術面の鍛錬の内容はともかくとしても、これから先にやっていくつもりのあれこれに関しては、少なくとも今の年齢ではどう考えても許可されそうにない。
母は俺が忍になることを反対はしないだろうが、拭い切れなかった子供らしからぬ自我の発達からはどちらかと言えば座学方面に力を入れて欲しそうで、この先それとなく水面下での攻防が繰り広げられることになりそうである。
休憩の手持ち無沙汰の時に歴史書や考古学（みたいなもの）の本を

何となく読破したのを目撃されてから、いつの間にか俺の部屋にその類の本が増えるようになったのだ。
最初は特に気にせずそこらにあった本を適当に読んでいたのだが、明らかに持ってきた覚えのない医学書関連の本が増えていて、母に「これ俺のところにあったんだけど」と尋ねてみると

「あぁ間違えて貴方の所に持って行っちゃったのね。折角だから、それも読んでみなさい」

等と口実を作られてしまう。
母は別に自慢するでも無いが、ご近所付き合い（一般人が多い）で俺の成長ぶりをもてはやされるのには満更でもないらしく、反則をしている身としてはこちらに純粋な期待の眼差しを向けてこられると正直少々後ろめたいものがある。
別に医療忍術やその方面の習得はやぶさかではないが、それでもこの先起こるであろうあれやこれに際しては、優先してという訳にもいかないだろう。
卓上で色々学ぶことは嫌いではないが、以前から考えすぎて優柔不断になるきらいがあるので、そういったことに掛かりきりになるよりかは、せっかくスペックの高い身体を活かして行動した方がいいと思うのもある。

――これも違う。本当の望みはそうじゃない。

ともあれ、そうと決めたからには何とか母の誘導をそれとなくかわしつつ、虎の子である白眼も習得したので、早速活用してみることに。
白眼の千里眼もどきの範囲を徐々に伸ばしていき、慎重を期してタイミングを伺い此方を悟られない距離から演習場等で修行している大人を対象に観察してみることから始める。
普段は立ち入ることが出来ないため初めて大人の忍の動きを目の当たりにしたが、それまで自分でやっていた鍛錬が児戯に等しいくら

いの中々の人外ぶりであった。
やっぱ忍んでるとかそういうアレじゃないな、と思う。
スーパーソルジャーか何かかな？
さりとて自分でもやれると信じ、お手本を見ながら必死に見様見真似した。
足捌き、跳躍の際の筋の伸張、重心の推移。
この世界では皆簡単に木の上を移動したり馬鹿みたいな跳躍が当たり前だが、やはりこれも忍補正なのか。
小さな植木を飛び超えを何度も飛び越えるのに始め、毎日反復することによってその木の成長に合わせて長い年月を重ねて精進し、いずれは木をも飛び越すほどに……というくらい気長にやるのが認識だったのだが、白眼で動体視力を上げてそれら忍の人達の動きを見て実際に真似してみると、跳躍力は見違えるほどになった。
尚、原理は不明だ。
同様に重心の取り方にしても、体勢を真似すれば何らかの力が加わったように整えることかできた。
イメージとしては、重りを付けたパラシュートは必ず重りが下になって落ちていくのと似ている。
この体勢を整えることができれば、よっぽどの事がない限り頭から落下するようなことはないだろう。
何というか、便利なものである。
まぁこんな感じで色々と習得していく。
このよく判らない原理は変則的な重力の作用だったりするのか、この世界の人々の体質による一種の特技なのか……いつもの如く神のみぞ知ることである。
そして、それらを真似できる自分も、いよいよもってＮＩＮＪＡの仲間入りを果たしてきたと言える。
――そうして行き着く先も、本当は分かってる。
そうして更に年月は過ぎ、６歳の誕生日を迎えた。

死ぬ気での修行の結果からか、身体能力面で同年代には負けないであろう、というくらいの自信はついた。
今では例の壁走りも、摩擦の皆無なつるつるの物でない限り、僅かな壁面の凹凸であっても利用して楽々こなせるようになった。
……物理的に、ではあるが。
ここまできて……いや、もうとっくに自覚してはいたが、チャクラの使用無しではどうしようもないという事に明確に向き合わなければならないだろう。
厳密に言えば、白眼でチャクラの流れが見えるので身体の内でのある程度の運用は出来るようになっている。
原作では下忍になってから教わるのであった気がするが、難易度はいかほどの物なのだろうか。
壁走りは出来ても、天井に張り付いたりすることは出来ないし、水面を走ることは出来ても着地は出来ない。
そう、つまりは忍術方面はおろか、チャクラの運用系の技は一切進歩がないわけだ。
もしかしたら柔拳ならこのままでもやれるのかもしれないが、それにしたって根本的なところで忍の基本であろう事が出来ないのでは、劣化にしかならない。

――そこで留まれば、諦めれば。

理由は、分かっているのだ。
もう、現実から目を逸らすのを止める。
それは、初めてチャクラを初めて使った日。
新聞のコラムの説明に従って手順通りに生成しようと、チャクラというものを意識した時の事が、原因であるのだろう。

……
……

……

『赤い……？ん……体が、ダルい……』

確か俺はチャクラの確認をしようとして、そしたら地面が迫ってきて……。

あぁ、何のことはない。気絶したのだろう。

だとすれば母なり父なりが気付いてくれるのを待つしかなかったわけだが、見たところ此処は病室でもなければ自分の部屋でもない。

赤い床。

それは元からの色ではなく、床一面に広がる液体が染める朱。

少し霞がかって不明瞭視界となっているが、そこはごくごく普通に家具が並ぶ一室。

ここは一体なんなのか……は心当たりというか、嫌と言うほど見覚えがあるが、ここにいる理由が判らない……と思った瞬間、唐突に等身大の鏡台が現れる。

いきなり出現したそれに驚く暇もなく、鏡に映った己の姿を見て納得する。

正確には自身の両眼。

赤く光る瞳に浮かぶ勾玉の型取る二重の変形五棒星の瞳孔。

見ただけで、それは分かった。

理解した。

それは写輪眼……ではない、ということが。

うちは一族の保有する血継幻界、写輪眼。

謂わば魔眼の一種で、その眼で観たあらゆる忍術・幻術・体術を解析してしまうもの。

忍者としては延髄ものの能力だが、この能力には更に上の段階があり、それが〝万華鏡写輪眼〟と呼ばれる。

一族の中でも秘中の秘であるこの能力の覚醒条件は『親しき者の

死』。

……とされているが実際にはかなりアバウトで、原作でカカシが開眼したあたりから雲行きはかなり怪しくなっている。

親しき者の死など、経験してた者は過去にも何人もいるのではと思うが、にも関わらずその存在さえ知っているのは極僅かだったのは……まぁ実力も兼ね揃えてということだと仮定しておこう。

で、問題は自分がそれを覚醒させているということだが。

根拠はこの空間。

この場所は前世で過ごした家であり、思った瞬間現れた鏡。要は自分が望むものを顕現させたということだ。

そんな幻想世界、思い当たるのは……万華鏡写輪眼を覚醒して得られる恩恵の一つである、イタチの使っていた『月読（つくよみ）』による精神世界。

各個人で昇華した時の能力はバラバラで、一つとして同じものは無いというものだったと思うが、似たような空間系だというだけだろう。

生まれて初めて発動してしまった写輪眼。

しかも万華鏡、という上級のもの。

発動したことはともかく、少なからず発動の条件を満たしているということは……。

……

……

…

「俺はあの人を殺した、ってわけだ。……まぁそのつもりだったんだから、それが確定しただけなんだけどな……」

あの後、精神世界からは直ぐに抜け出した。

チャクラ切れを起こして維持できなくなったようで、次に起きたと

きは死ぬほど筋肉痛が酷く、このせいで母の過保護が加速したのは間違いない。
やはり体力は忍の資本なのか、身体エネルギーの仕組みを実感した瞬間だったと思う。
そしていく日か後に、再び件の〝眼〟を発動した所で最悪の欠陥が判明した。
体質故のものなのかそれとも他の要因によるものなのかは定かで無いが、チャクラを練ると自然に写輪眼が発動してしまうのだ。
それ自体は、目立つが仕方の無いものとして諦めることも出来なくは無いし、どうせ白眼も同じことだし対策は立てようもあるので、それだけで時間が限られる中チャクラを使おうとしない様な愚かな選択を取ることは、勿論ない。
問題は、俺は制御も禄に覚えず〝万華鏡写輪眼〟――身の危険を誘い、更には盲目へと常時突き進む、爆弾を手にしてしまったのだ。
しかも慣れないうちは膨大なチャクラを消費する写輪眼を単体で使う事が出来ず、制御するため訓練をしようにも時限爆弾（失明）は到底待ってくれるとは思えず。
肝心のチャクラを練ることが出来ないのでは無茶を繰り返すして文字道理に命を燃やすしか無い。
そう言った意味では白眼を手に入れるまでの日々の絶望は、他人には到底理解し得るものでは無い。
そうした苦労の末に、精神エネルギーでの運用で、誤魔化していたのだ。
「……いや、違えだろ。誤魔化しだ、それは」
……と言うのも、全ては問題の先送りにする言い訳だったのは、自分自身でよく分かっていた。
言わずもがな、精神世界のソレが、全ての元凶である。

死への恐怖、罪の呵責、それらが常に付いて回るがこの世界なのだ。
――それを認識したくなくて、逃げていた。
転生？ＮＡＲＵＴＯの世界？好き放題に無双？
――そんなものは求めていなかった。
力を付ける、その先にあるのは人を殺すという行為。
――この先、いつかは絶対に直面する問題から逃げていた。
この世界の両親は、俺を愛してくれている。この人たちを守るためにも。
――だが、それらも人殺し。
生きるため、覚悟を決めなければ、待つのは死。
――そんな形だけの大義名分があったとしても吐き気がする。

俺は、違う。
自分は、違う。
あの人とは、違う。
もっと、マシな何かであると思いたくて。
だから、俺はそれを否定した。
その象徴――否定する、鏡写しである証拠の兄殺しを、否定した。
「だけどそれは、乗り越えなければ繰り返す。言い訳は打ち止めだ。誤魔化さない。もう、自問自答は終わりだ。俺は、ソレを、忘れない」
だがそれも、認識すれば、思い出せば、自覚すれば、向き合えば。
蓋をしたソレを、もう忘れることはない。

俺は死ぬ間際、兄を殺した。
ただ、それだけ。
そのことに関して他にどうしようも無かったし、次に同じ状況になっても同じことをするしかないのだろう。
そう思い、考え、言い訳を連ねても、１と０の差はどうしようもな

いもの。
その経験は、人としての……現代を生きた者としての一線を越えるもの。

この世界にいる限り殺しは付き物である。

現代人の感性でははっきり言って吐気がする感性だ。
その筈である。
現に、何回も吐いた。
吐いて、そうして徐々に克服していくものなのだと思いたかったが、俺が吐瀉物と共に吐き出したのは倫理感であったらしい。
これを、無力の言い訳にしない楔にするための、通過儀礼の儀式と定めた。
理論的に考えればこれはメリットなのだろう。
それは、価値観が変わった後に理由付けても失ったものを正常に測ることは出来ないのであろうが。

「それで、いい。不要なものは、置いていく。心はここに、置いていく」

まず、認識の変化を実感した。
これから生きていくために〝人の命〟というものの価値に折り合いを見つけ、向き合っていくつもりであった。
それは、確かである。
だがそれは一足飛びに無用なものになってしまっていたのだ。

「それならそれで、構わない」

始めは、クーデターに対する策を考えるとき、最初に考えることは誰を片づけるの一番いいかということであった。
極自然に浮かんだそれは〝片づける〟とはどういう事なのか、意識さえしていない自然な思考だったのだ。

そのことに、今後の計画を立てて記した自分の手記を書き起こしたとき、恐ろしいと思う筈の考えになのに、何も感じていない自分がいる。

自室だったが、構わず吐くことにした。

「それで、いい。俺はもう、躊躇わない」

この考えに慣れるべく、ひたすら身体面を鍛えることにひた向き、無心になってやった。

訓練の為密かに森に通い、訓練をしていてふと気付くと、自分の周りには野性動物の死骸で溢れていた。

全てが急所を一撃で刈り取っていて、中には首輪の付いた猫でさえも含まれていた。

必要な犠牲、などと嘯くつもりはない。

ただ、糧にする。

己の力の、餌とする。

気分など殆んど動いていなかったが、指を喉に突っ込んで無理矢理にでも吐いた。

狂気が、迫って来る音がした。

結局それからこれまでを取り戻すべく、死ぬ気で命を刈ることの容易い力の制御を必死で覚えて、里を歩いていた時見付けた光景に……自分の中の倫理感（ストッパー）を、枷を、完全に砕き、開放した。

「もう、繰り返さない。こういうことを、見逃さない！」

「――と言うわけで、クズな教えに習うゴミの肥溜めの貴方達にはいなくなって貰うことにします」

街の路地裏。

昼間そこで、筋違いな悪感情や単なる劣情からの鬱憤を晴らしていた者達が、今度は己の身にその代償を受けていた。

額充てをした者が幾人も。

何れも里に所属する者であり、服装から、名門うちは一族の者までいることが判る。

中には、中忍以上の実力を持った実力者もいるのだが、拘束されているわけで無いにも関わらず、一人の〝少年〟の前に跪いていた。

その眼は紅く、見下げる瞳に浮かぶのはほの暗い諦感と確かな決意を同梱する、全てを飲み干す星模様。

その、何者も窺うことの適わない、どこまでも冴え渡ったような視線の前に、幾年も年の離れている筈の大人達は只々呆けるしかなかった。

少年は、その年頃には到底持ち得ない〝無〟の表情で、されど嘲いながら一言、告げる。

「……永劫、星食（ほしはみ）」

翌日、木の葉の里では忍の集団失踪事件が取り沙汰された。

里抜け・暗殺・誘拐などが疑われたが、里を挙げた調査に関わらず、遂には手懸かりの一つもなく真相は謎のままとなる。